私はチッソにだまされた

水銀廃液

社長が飲んでみせたのはただの廃水

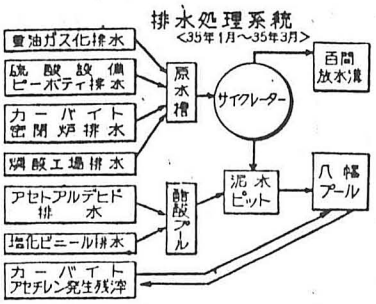
浄化装置は見せかけ？

ニガリ切る寺本県知事

「私はチッソにいっぱい食わされたのではないか？」―厚生省の水俣病公害認定が間近になった最近になって、寺本知事は三十四年十二月、当時の吉岡社長が「もう水俣病は起きない」と、サイクレーター（浄化装置）から出る水をコップにくんで飲んでみせた情景を思い浮かべながら、チッソへの不信感を高めている。その疑念を裏付けるような資料がつい最近、チッソから県当局に提出された。

"当時"の資料から推理

吉岡元社長



十二日の県政記者団との定例会見でも、寺本知事は「あの水はなまぬるい水だったが、透明だった。吉岡社長が目の前で飲んでみせるもんだから、もちろんすっかり安心できると思ったんだ」と怠る。

"あの水"とは、サイクレーターの完成当時、サイクレーターから排出された水のことである。しかし、当時のチッソ水俣工場の排水処理系統は別図のとおりで、水銀を触媒に使っていた間題のアセトアルデヒド工場と塩化ビニール工場からの廃水は、サイクレーターには流れ込んでいなかった。したがって、吉岡社長が飲んでみせた水は"もともと水銀を含まない、危険度の低い水"だったかもしれないのである。

つい最近、チッソが県公害調査室に提出した資料によると、サイクレーターが動き始めた三十五年一月から三月までは、水銀を含むアセトアルデヒド、塩ビ四工場からの廃水は、酢酸プール―泥水ピット（ため池）―八幡プール―カーバイド、アセチレン残滓（し）―八幡プールと循環していた。

サイクレーターに流入していた廃水は、水銀を含まない重油ガスなど四つの工場からの廃水だったのである。

アセトアルデヒド工場の廃水がサイクレーターにかけられたのは、これもチッソが県公害調査室に提出した資料によると、三十五年三月から四十一年五月までで、この期間は同工場の廃水は大部分を工場内で循環させ、海には流さない方式をとりながらも、ほんの一部は酢酸プール―泥水ピット―八幡プール―原水槽―サイクレーター―百間排水溝（一部はまた泥水ピットへ）の順で海に出ていた。

しかも、サイクレーターは有機水銀の浄化能力がないことがわかり、四十一年六月からはアセト工場の水を海に流さない完全循環方式が採用されている。

三十四年十二月当時、漁民騒動の激化でチッソは苦境に立ち、サイクレーターの完成を急いでいた。工費約六千万円。十二月二十四日に完工式をあげ、会社側から吉岡社長ら、来賓として寺本知事や当時の中村水俣市長らが出席、寺本知事は祝辞まで述べている。

さらに寺本知事は、サイクレーターで有機水銀が完全浄化されると信じ込んでいたのか、サイクレーターの完成直後「不知火海の魚の信用回復のため、サイクレーターの完成を機会に県としてもPRが必要だ。不知火海の魚を食う会をしよう」と、県政記者団にわざわざ試食を"提案"した事実さえある。

この"提案"は記者団が断わったため実現しなかった。十二日の記者会見でそのことを思い出して、寺本知事は二ガリ切っていた。

水俣病の原因を追究していた厚大の水俣病研究班が、水俣病の原因は有機水銀だという結論を厚相に答申したのは、サイクレーターが完成する直前の三十四年十一月十二日である。そのころチッソは「工場は無機しか使っていない」と言っていたが、この答申内容を当時チッソは知っていたであろうと推測されるし、知っていながら、危険度の低い工場からの廃水を浄化した水を吉岡社長が飲んでみせたとすれば、寺本知事はやはり甚原を打たれたことになろう。

◇熊本県公害調査室長の話　最近チッソから提出された資料によると、サイクレーターの完成当時は、最も問題のあるアセト工場からの廃水はサイクレーターに流し込んでいない。となると、推理小説めくが、吉岡社長が飲んでみせた水はもともと水銀を含まない廃水だったろうし、寺本知事がいっぱい食わされた可能性が強い。